

学級通信の起源とその変遷

「日本作文の会」機関紙『作文と教育』の分析を中心に

木村 学*

本研究は、学級通信という教育媒体が生活綴方教育を土台としながら、学級文集から一枚文集という変化を遂げ、なぜ、どのように定着していったのか、そのプロセスを明らかにすることが目的である。学級通信実践は、概して各々の教師の実践から始まったものであり、後に民間教育運動や教育雑誌などの普及を通して、我が国の教師たちに浸透していったものである。そこで、民間教育研究の機関誌のレビューや、教師たちが残していった各年代の実践記録等を収集し分析することを試みた。特に「日本作文の会」の機関紙である『作文と教育』を中心に、その他当時の著作等を対象に分析を行った。調査の結果、次の2つのことを明らかにすることができた。①学級通信という概念が定着したのは、1957年前後である。②当時の教育界の変化として、学級づくりや仲間づくりの指導に主眼が置かれるようになった。

Key words : 学級通信, 学級文集, 生活綴方教育, 日本作文の会

1. はじめに

はたして学級通信とは、いつ、だれが、どのようにはじめたものなのだろうか。教師たちの日常の教育実践から生まれたといわれる学級通信は、その源流として生活綴方教育が土台になっていると一般的には考えられる。戦前・戦後、子どもたちの綴り方作品は、担任教師によって学級文集という形でクラスに共有され、やがてその学級文集は日刊や週刊というように発行頻度を上げ一枚文集となり、やがて1960年頃に学級通信という形で普及していったと言われる。しかし、この学級文集から一枚文集、学級通信へと変化を遂げた教育媒体が、なぜ、どのように定着していったのか、そのプロセスと学級通信実践の盛衰についての全体像を明らかにしたものは、生活綴方教育の膨大な研究に比べると筆者が散見する限りわずかである。おそらく、その理由は先述の通り学級通

信が各々の教師の実践から始まったものであり、後に民間教育運動を経て教育雑誌などの普及を通して、我が国の教師たちに浸透していったものだからであろう。つまり概要を明らかにするためには、民間教育研究の機関誌のレビューや、教師たちが残していった各年代の実践記録等を収集し分析するしかないのである。

そこで本研究では、「日本作文の会」の機関紙である『作文と教育』を中心に、その他当時の著作等を対象に分析を行うことにする。調査観点は次の2つである。①学級通信という概念が定着したのはいつなのか。②その背景にどのような教育界の変化があったのか。

2. なぜ学級通信実践の意義を問うのか

現在でも、小中学校の現場を中心に多様なスタイルの学級通信が存在しており、学級通信という

*人間学部児童発達学科

用語や概念を明確に定義することはできないだろう。例えば、保護者への連絡帳としての傾向が強い通信もあれば、子どもたちの学習記録が中心の学習通信と呼ばれるようなものもある。本稿では、学級通信という用語や概念がどのように定着していったのか、そのプロセスを明確にすることが目的である。

一般的に学級通信とは、学習指導と生活指導の双方を含めた学級運営という観点から、学級の子どもたちや保護者に向けて担任のメッセージを伝達するという役割を担っていたものである。しかし、そのような伝達媒体としての機能以上に、教師自身の授業実践やクラス運営への省察を補完するものとして重要な役割も担っていたと考えられる。

木村（2015）は、教育活動として義務付けられているわけではない学級通信を、35年間継続して書き続けた小学校教師のライフストーリーを描きだし、学級通信を書き続けるという行為は、教育的意図を問うより以前に、教師個人の生き様と深くかかわったものであり、「教える—教えられる」という教師—児童の権力関係を超越するものだと述べている。そこでは、教師個人と児童たちが相互に課題に向き合う関係が構築され、学力の優劣にとらわれない多様な価値観に基づく学級づくりを可能にするとして述べている。

最近では、新聞の特集でも学級通信の実践が取り上げられている。2017年に読売新聞が学校を特集した記事には学級通信が取りあげられ、そこには1980年代に担任教師から毎日、学級通信が届いたエピソードが懐かしく語られていたり、現在でも学級通信を発行し続ける教員の想いが掲載されたりしている（読売新聞、2017）。その他にも、教育科学研究会が発行する機関誌『教育』においても、2018年に「書いてみませんか、学級通信」という特集が生まれ、教師たちの個性あふれる学級通信実践が紹介されている。

一方で、日本の学校現場では、突出して秀でた教育実践があれば足並みを揃えるようにと同調圧力が働く傾向があったし、現在でもそうした傾向がないとは言えない。例えば、教員文化について問うた小学校教員へのアンケート調査によれば、

「学級通信は他の人が出せないことが多いのでさしひかえるように」、「学級通信・文集の発行は学年でそろえてやること」等の意見が出されるという（久富、1994）。実際に、小学校教員の松島（2018）は、現在の学校内には、学級通信を発行するような風土がなく出しづらいと現状を語っている。

上述のようにこの実践は、その意義が認められてはいるものの、いまだ確立した教育方法とは認知されていない。では、なぜ学級通信実践の意義を問うのか。それは、この学級通信という教育媒体を通して、特に若手教員の学級運営に有効であると考えられるからである。実際に、筆者の所属する小学校教員養成課程を卒業した新任教員の一人は、同僚に学級通信を発行する教員がおり、2年生のクラスで学級通信の発行を試みクラス運営が成功している。こうした実践に改めて光を当てるためにも、学級通信実践の実践的方略を構築する必要があり、その前提としての学級通信実践の起源と変遷を明らかにする必要があるだろう。

3. 学級通信の起源の概略

学級通信の起源を探るうえで、太郎良（1992）の「学級通信の歴史」が参考になる。太郎良によれば、「学級通信という語は、事典でみる限り、1960年代に用語としては必ずしも成熟せぬままに広義のものとして登場し、ごく近年になって狭義のものとして定着しつつあるということになる。そして、事典に見られるこうした状況は、学級通信というものが、教育学の理論や教育政策に導かれて生まれたものではなく、教師たちの日常の創造的な教育実践上の必要から生まれ、次第に定着してきたものであることを示唆している」という。ここでいう広義の学級通信とは、学級内で発行される通信物全般を指しており、具体的には、学級だより、学級文集、一枚文集などが含まれる。さらに太郎良は、検討を進める中で「1920年代から1930年代の広義の学級通信とみられるものを素描してみたつもりである。（中略）結局は学級文集の歴史を点描しただけではないかという批判があるかもしれない。しかし、学級文集を抜きにして、学級通信の歴史も、またその実践も

語れないのではないかというのが筆者の考えである」と述べ、戦後の教師たちが学級通信をはじめた契機として、生活綴方教育の中心であった近藤益雄による1930年代の学級文集づくりや、古くは1910年代の小砂丘忠義の実践等がその源流として考えられると述べる。

それら学級文集の中身には、綴り方作品や詩、童謡、自由画などが掲載されており、子どもたちと読み合ったり教材としての役割もあったという。学級文集は主にガリ版印刷と呼ばれる謄写印刷で、月に一回や年に数回の発行であったという。ガリ版印刷は、原紙に鉄筆で文字を刻み、原紙を張った木枠にインクを塗って下の紙に印刷する簡易印刷技術である。終戦から1960年ぐらいまでは、盛んに使用された黄金時代であったという。ガリ版印刷の学級文集がどのくらい発行されていたかといえば、参考になる数字として1951年から始まった「全国文集コンクール」では268点、1952年には1656点、1953年には1712点の参加があったという（西川ら、2009）。

その後、学級文集は月刊や週刊というように発行頻度をあげ、やがて一枚文集と呼ばれるようになり、いつしか「学級通信」と呼ばれるようになるのである。例えば、『学級通信ガリバー』で著名な村田栄一は、1958年に川崎市の新任教員として学級通信を始めたという。当時を振り返り、「授業のようすをこども自身の作文を通して定着し、親に伝えるということを試みていた。民間教育運動の主流が、戦前からの遺産として生活綴方を受け継ぐという意識で占められ」ていたという。

こうした情報を基に考えても、1960年前後に学級通信という用語が定着したことを考慮しても、やはり学級通信の変遷をたどるためには、調査対象としてはそれ以前の1950年代に焦点を絞ることが必要になる。

そこで、まず国立国会図書館のデータベースで検索してみると、目次に学級通信というキーワードのある著作が見つかる。著作の最も古いものでは、「生活学級の経営」（1949）で、目次には学級新聞や学級日誌と並んで「学級通信」とある。続いて「小五教育技術」（1950）で、目次に「私の学級通信」とある。さらには雑誌「北海教育評論」

に「ひなどり学級の一学期：学級通信と文集作りの実践」（1955）とあり、わずかであるが1950年代前半にいくつかの著作が検索に挙がってくる。その後、間をおいて1957年にはなぜか急激に検索数が増え、勝田守一編の「新しい学級づくり」、今井誉次郎・宮坂哲文監修の「私たちの学級経営」など11件の著作が検索できる。その後、1958年には、小学館の発行する月刊誌「教育技術」が検索され、各学年の雑誌に毎月のように学級通信というキーワードを含んだ記事が登場する。

以上の調査から、より厳密には1957年前後に学級通信実践の定着の時期と考えてよさそうである。そしてこの時期は、後述するように1950年の「日本作文の会」の発足とその後の発展に大いに関係があると考えられる。それではさらに1950年代後半に焦点を当て、機関紙『作文と教育』について見てみよう。

4. 「日本作文の会」機関紙『作文と教育』の影響

1) 「日本作文の会」の発足

「日本作文の会」は、国分一太郎らを中心とした「日本綴り方の会」が1950年に発足し、その翌年1951年に改称された民間教育研究団体である。同時期には、1950年6月に創刊された無着成恭らを中心とする「つづりかた通信」の実践がある。それらの会員の多くは、その後「日本綴り方の会」のメンバーとなり、1950年11月に創刊された『作文研究』へとつながる大きな役割を果たしたという（菅原、2009）。

「日本作文の会」は戦前の生活綴方教育を土台とし、現在でも「すべての子どもに生活に根ざした表現と生きる力を」というテーマを掲げている。長年、月刊誌『作文と教育』を発行しており、2019年9月号で通巻877号と歴史の長い会である。会の活動としては、作文教育や授業実践の交流が全国各地で展開され、年に一回の大会も開催されているが、会員数や定期購読者数の減少から発行部数の採算を取るには厳しい現状もあるようである。

「日本作文の会」は、常任委員を中心として生

活綴方の歴史を各年代ごとにまとめるという作業を行っている。そのなかで50年代後半の特徴として、以下のように述べている。学級通信「きしゃぼっぱ」を発行した1955年の土田茂範『村の一年生』や、1956年の小西健二郎『学級革命』等を例に挙げ、学級づくりや仲間づくりの実践が目された。そして同時に生活綴方と教科教育を関連づけた実践記録も盛んに発行されたという（日本作文の会、2001）。

この当時の『作文と教育』の紙面を調査することで、学級通信の起源を解き明かすことができるかもしれない。そのための調査の手順として、大変地道な作業ではあるが1950年の創刊号から1957年12月までの全部で67号を対象に、「学級文集」、「一枚文集」、「学級通信」という用語が掲載されている箇所がないか一ページずつめくっていくことにする。

2) 一枚文集の広がり

まずは、1951年3月に発行された『作文と教育』第3号を見てみよう（山本、1951）。そこには文集発行の際に一番大切なことと考えられる理念が述べられている。「子どもたちが、自分の生活を

組織化し秩序づけていくための指導方法として文集の経営を考える時、我々はこの文集経営についても子供を中心としての立場を忘れてはならないと思うのである。（中略）文集を子供たちの手によって発行し、子供たち自身が、教室生活を文化的に推進し、豊かな生活組織を育てていくように指導する」。このように文集づくりは、大人である教師から与えられる文化ではなく、子どもたち自身で創造していく子どもの文化として捉えられている。そこでは、学年に応じて多様な文集づくりの形態が存在している。表1は、山本（1951）の文集づくりの分類を筆者が整理したものである。

このように多様な形態の文集に分類されているが、特徴としては、第一に子どもたちの主体的な活動を保障しようとしている点であり、もう一つは、綴り方作品の内容として科学的な学習に関連づけようとする内容が提示されていることである。さらに、子ども主体の活動とするために、「ガリ刷の生み出す教室の文化財の一つとしての文集、それが子供たちの生活指導の上に、大きな価値をもつ一つの理由はそのマスプロ性の簡易さにあると思う。（中略）教室にガリ刷の備えつけがほしく、子供達にも早くからガリ版を利用させたいと思う」という教員の願いが述べられている（山本、1951）。

次に、1954年11月に発行された31号を見てみよう（日本作文の会、1954）。「このごろの文集」という記事の中で「文集はたしかによくなっている。しかし、旧態依然組もなかなか多い。最近、『おかあさん』『けんかについて』『山』……というように一つのテーマについてみんなのみたことや考えたこと、思いだしたこと、しらべたことや詩などを編集している文集はたしかに特徴的である。だがこれらの文集にも、ほんとうにかかねばならないこと、書きたいことを書かせる指導をしているかどうか、反省の余地がある」と述べられている。この文章からは、多様な形態の学級文集が存在し、よりよい実践を模索し、文集の内容が変化しつつある時期であると考えられる。

さらに文集の編集方法についても、様々な工夫がなされていたようである。「親しみやすくする方法として原紙をきるばあい、二段、あるいは

表1. 文集の多様な形態

文集の呼称	文集の特徴
個人文集	各児の保存しておいた作品を整理し、学期毎に編集し表紙をつけて文集にする。
グループ文集	ガリ刷によって各グループに作らせる。
回覧文集	清書した作文を収録編集して、児童相互、あるいは家庭に回覧。
学級文集	夏・冬休み中のレポート集・日記集・詩集など、簡単なものについて、学級全員に鉄筆を握らせ、収録編集することからはじめる。
研究文集	自由研究や観察実験等の研究事項をまとめて編集。
教室文化文集	学級・学校の生活全域と家庭生活、更にレクリエーションを一元として生活を拡充し高揚していくための文化機関誌として、月毎、又は隔月に雑誌風に編集していく。
研究グループ文集	自由研究等クラブの長として、あるいは最高学年として、そのクラブの研究成果をまとめて編集する。

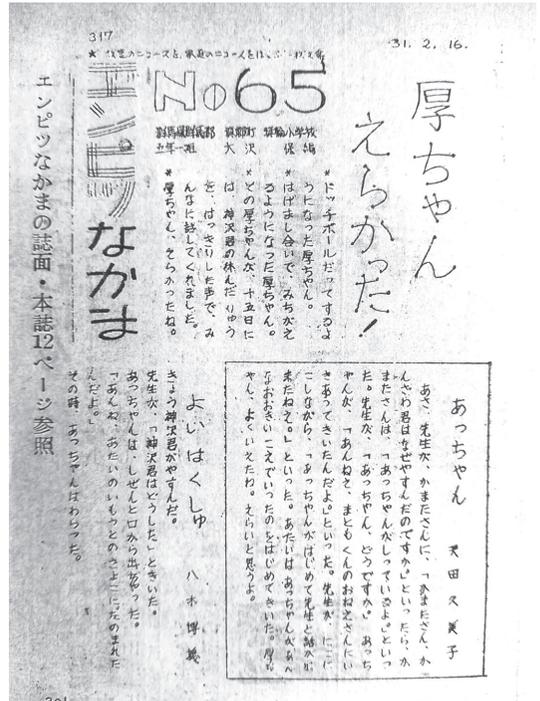
三段にするとか、二段と三段を適当に配合するとか、とくによませたい文や詩を点線やふつうの線とかこんであつかうとか図画や版画の作品を大きくあつかったページも配るとか、いろいろな方法が現れてきているのもいいことだと思う。各頁の紙面に変化をつけると文集は楽しいものになる。」(日本作文の会, 1954)

1955年6月に発行された37号を見てみよう。この時期から一枚文集という用語が目につくようになる。「私も一枚文集的なものを『ふもと』という名でだしている。この『ふもと』は指導者として、また子どもたちのなかまとしての、私の意見の発表、各新聞の論評、そして生活文・詩、および鑑賞文・詩を多く掲載することによる鑑賞指導、父母との結びつきのための父母のページ、また各地からのおたよりの紹介など多角的な経営をしましたが、一枚文集的な性格を強くうちだしていき、子どもたちの作文指導の足場としていきたいと思ってやっている。」このようにこれまでの学級文集とは少し性格の異なる媒体が、教員から発行されていたわけであり、「一枚文集的」という表現が示しているように、学級文集や一枚文集という用語が混在し一つに定着しているわけではなかったと推察できる。

さらに杉山(1955)は、子どもたちが活動を通じて役に立つ文を、からだ全体でかかせるために「新聞作り」をはじめたという。例えば、「くもみょう」という集落にすむ、農家の子どもらの新聞には、乳牛の飼い方などが紹介され、「さくら」という学校の南側の集落の非農家の子どもたちでだしている新聞では学級内のニュースなどが紹介されている。このように子どもたちの日常の身近な事柄が対象となることで、新聞というスタイルでもあることから、より迅速な発行が期待されるようになったのだと推測できる。

1956年11月に発行された54号を見てみよう。この時期には、紹介される実践の多くが一枚文集という冠を付されて紹介されている。その中で評価の高い文集を見てみよう(図1)。「では、ついで『エンピツ仲間』というのもやはり一枚文集で、五年生のクラスのもの。これはしっかりできていて、敬服していいでしょう。一枚文集のぎりぎり

の使い方がされている。四頁のワクのなかで、子どものもっている問題を、それが冷えきらないうちに、みんなの前にだし、みんなに読ませている。このように生活のなかからタイムリーにとりだされ、みんなのなかでもまれるというのが大切な点だと思う。この学級では毎週一枚ずつはでているようです。」



*『作文と教育』54号(1956)より転載

図1. 一枚文集「エンピツ仲間」

この実践が評価されているポイントは、子どもたちの日常の身近な話題がとりあげられ頻繁に発行されている点である。さらに編集方法についても、以下のように、その評価できる点と限界性が指摘されている。「教師の指導もうまく、編集が確かで、紙面に変化をあたえている。独特なあたたかみがあり、謄写文字もきれいで読みやすい。しかしまた一枚文集の限界というものも考えさせられる。つまり土俵場がせまいので、小さく、端切れをちよっ、ちよっと入れるかっこうになる。問題をふかめ、こなしていくということができない。じっくり対象ととりくんだ作文が、一枚文集ではのせきれないのだ。総じて、一枚文集には機動性はあるが、子どもに十分とりこませるだけの

息の長さ、深さが足りないで、それが限界みたいなものになっている。」

このように一枚文集は、学級文集と比べれば、より発行頻度も増え内容的にもより子どもたちの身近な読み物になったと考えられる。一方で身近なものになった半面、問題として学習との関連性が問われることになるのである。「最近の文集をみて一般的に言えることは……。 (中略) 一枚文集が多くなったことである。これには教室のうごきに密着したものが多く、文集が教室の菌車となって動いているように感じられる。(中略) 第六に、いわゆる学習と直結したものが少ないということ。これは実践の科学性ということがまだ不十分だということでもあらう。」一枚文集は、こうした課題を解決していく過程を経て、学級通信へと変化を遂げていくのである。

3) 一枚文集の限界と学級通信の始まり

1957年5月に発行された60号を見てみよう。「転任してきたT先生が三年前のある校内研究発表会で『わたくしのつくってきた一枚文集』というテーマをとりあげた。そして編集のしかたや、子どもや親たちの文集に対する関心や、この仕事をすすめる教師の苦心やよろこびについてこまかく語ってくれた。まとまった文集を学期毎に出していたわたくしは、できあがった文集の利用のしかたにこまっていたときであったから、『なまなましい記事をそのぬくもりのさめないうちに子どもたちになげかけ、その生活態度や文章を連続的に高めていく』というやり方はとても参考になった。わたくしはT先生のしげきを受けて、さっそく一枚文集の名を『ひとあし前へ』とつけ、学級通信といっしょに毎週発行するようになった。」この文章からは、まさにこれまで学期毎に学級文集として発行していた教員が、一枚文集の理論に共鳴し実践を変えていった事実が語られている。

そして学級通信という用語も提示されているが、ここでは、どちらかと言えば学級通信は、次に引用するようにお知らせとしての機能を持つものであり、そこに一枚文集の機能が加わったものとして、学級通信が発行されているのである。「わたくしたち（校内で同じようなやり方をしている

先生もあるから)の文集の表題は『学級通信』にしている。ここへは、その週の学習予定(時間割と学習内容のあらまし、行事予定、課題、当番表など)父母へのよびかけ(PTAの案内や報告、おかあさんからの手紙など)子どもたちへのよびかけ(このごろの学習態度、前の週の反省や本週の努力目標、児童会の問題、家庭学習のしかた、読物の紹介など)学習や生活のグループ別ならびに個人別成績などをのせる。(中略)学級通信の裏に文集のページをつくっている。(半紙は両面ずりになるのであらまし、厚い目の紙を買っておく)このように学級通信は、当時の文集づくりの様々な課題を乗り越える形で、発行頻度の確保と、学習との関連性を担保する発行物として定着していったのである。

さらに学級通信の実践は、学校生活の範疇を超えた可能性をも示している。1957年7月発行の62号を見てみよう。「夏休みには、子どもたちにさまざまな活動をさせたいものです。ゆたかな経験をつませたいものです。さまざまな活動、ゆたかな経験、それをいっそう意義のふかいものにする

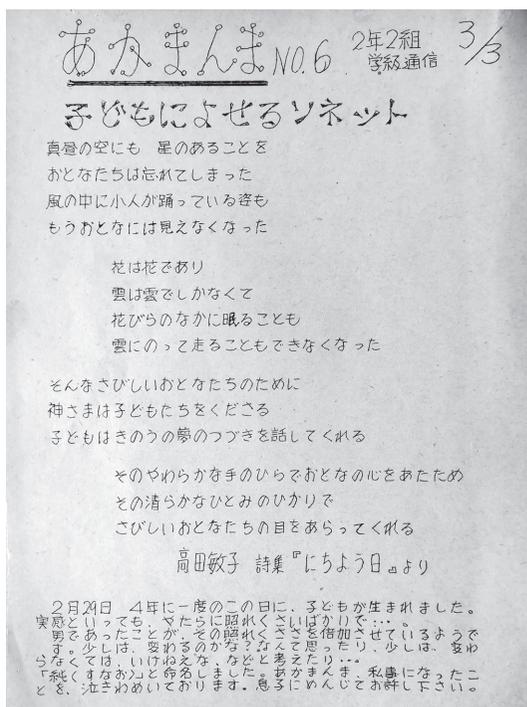


図2. 学級通信「あかまんま」

るために、いままで以上に、多角的な文筆活動をさせたいものです。夏休みの学級通信はここのところを第一に考えてつくみましょう」と述べられており、朝のラジオ体操の会にいて町内ごとに配ったり、忙しい場合は招集日に配ったりしたという。

図2は、1975年に東京都の新任教員によって発行された学級通信である。用紙のサイズや編集のスタイルが図1の一枚文集に類似しており、当時の教員たちによって一枚文集の良さが受け継がれていたと言えよう。

5. 総合考察

以上の結果から、1957年前後を学級通信実践の起源および定着の時期と捉えてよいであろう。そして、1957年当時の学級通信とは、学級文集や一枚文集の実践を継承し、発行頻度の確保と学習の関連性を担保する発行物と概念規定できよう。

それでは、なぜ1957年に急激に学級通信の実践が普及していったのだろうか。その背景に何があったのか、改めて生活綴方教育に目を向けてみよう。奥平(2008)は、戦後の生活綴方教育の盛衰について、1950年代前半の子どもの生活の変化に焦点を当て分析を行っている。1950年に日本綴り方の会から『作文研究』が創刊され、1950年前半は生活綴方教育を基礎にした実践が全盛を極めた。同時にそれは貧困からの脱出と労働からの解放であったという。例えば、代表的な実践として無着成恭の「山びこ学校」を挙げることができるが、貧しかったのは東北だけでなく、敗戦後の日本全体が経済的貧困状態であり、そこからの解放が教育の課題であったという。しかし、時を経て1950年代後半になると生活綴方教育はその勢いが後退しはじめる。その理由としては、労働からの解放が可能になったこと、科学的な教育の必要性が顕著になったこと、学級の集団づくりへの関心などが挙げられている。

したがって1950年代前半は生活綴方教育に基づく学級文集の過渡期であり、1950年代後半は、一枚文集という実践の短い期間を含み、学級通信実践の黎明期と言える。これまでの検討を整理す

れば、次のようになる。学級通信は、全国の教師たちによって実践が試みられはじめ、やがてそれら実践に学級通信という用語が当てられるようになり、その後、教育雑誌などで学級通信という概念が普及していったのである。結論として、以下のように言える。①学級通信という概念が定着したのは、1957年前後である。②当時の教育界の変化として、学級づくりや仲間づくりの指導に主眼が置かれるようになった。こうした背景の基、教員たちの知恵や工夫が学級通信という教育媒体として結実していったのである。

6. 今後の課題と展望

本稿では、学級通信の起源について明らかにすることができた。今後の課題としては、60年代以降の学級通信についての分析が残されているが、木村(2010)は学級通信実践を通じた学級づくりについて物語生成という視点で分析を行っている。そこでは子どもたちは教員との日記交換を通して、体験を語り体験を深め、子どもたちの描いた季節の変化や生き物とのかかわりの日記は、同じようなテーマが揃うと学級通信に掲載される。学級通信というクラス共通のテーブルの上で相互応答的なコミュニケーションが展開され、ファイルに蓄積されることによってそこに物語性が付与されるという。このような学級通信と学級づくりの関連性に焦点をあてたさらなる分析が求められるだろう。稿を改めたい。

引用文献

- 木村学(2010). 大楽光明教諭による生き物をめぐる学級文化の創造, 環境教育学会関東支部年報, 4, 51-56.
- 木村学(2015). 小学校教師のライフストーリー——学級通信は35年間なぜ発行され続けたのか, 文京学院大学人間学部紀要, 15, 163-178.
- 久富善之編(1994). 日本の教員文化——その社会学的研究, 多賀出版, 235.
- 教育科学研究会編(2018). 特集「書いてみませんか, 学級通信」, 教育科学研究会編『教育』, 867, 56-90.

- 松島あゆみ（2018）. 「その日だけの通信『黒板通信』」特集「書いてみませんか, 学級通信」, 教育科学研究会編『教育』, 867, 76-77.
- 村田栄一（1982）. 教室のドン・キホーテ——僕の戦後教育誌, 筑摩書房, 48-49.
- 奈良達雄（1957）. 夏休みの学級通信, 日本作文の会編『作文と教育』, 62, 48-49.
- 日本作文の会（1954）. 日本作文の会編『作文と教育』, 31, 60.
- 日本作文の会（1956）. 文集対談, 日本作文の会編『作文と教育』, 54, 48-56.
- 日本作文の会編（2001）. 日本の子どもと生活綴り方の50年, ノエル, 46-56.
- 西川祐子・杉本星子（2009）. 戦後の生活記録にまなぶ——鶴見和子文庫との対話・未来への通信, 日本図書センター, 203-205.
- 奥平康熙（2008）. 戦後生活綴り方教育全盛の時代——1950年代前半の子どもの生活と戦後教育実践, 和光大学現代人間学部紀要, 1, 7-24.
- 小学館（1950）. 小五教育技術, 小学館.
- 菅原稔（2009）. 戦後作文・綴り方教育史研究——同人誌「つづりかた通信」に見る戦後作文・綴り方教育復興の一側面, 岡山大学大学院教育学研究科研究論集, 142, 9-17.
- 杉山英雄（1955）. 三年生の作文教育, 日本作文の会編『作文と教育』, 37, 34-37.
- 杉山穰（1949）. 生活学級の経営, 牧書店.
- 谷山清（1957）. 学級経営とじかにつないだ文集, 日本作文の会編『作文と教育』, 60, 33-37.
- 太郎良信（1992）. 学級通信の歴史 特集「共感を育てる学級通信」, 教育科学研究会編『教育』, 556, 15-24.
- 山本正格（1951）. 文集経営試案, 日本作文の会編『作文と教育』, 3, 6-8.
- 読売新聞（2017）. 学校 モノ・風景 学級通信, 2017年8月2日.

（2019.9.25 受稿, 2019.10.31 受理）